

愛用の時計

△氏は週末の旅行に出かけるため、用意をととのえていた。服のポケットのなかでは、ラジオが天気予報を告げていた。

「あすは、よいお天気でしょう……」

楽しいげに口笛を吹きながら、△氏はハンケチを出し、腕時計を軽くぬぐった。これは彼のいつもの癖だった。

癖とはいうものの、頭をかくとか耳をつまむとかいう、意味もない動作とはちがっていた。彼はその時計を大切にしていたのだ。大げさな形容をすれば、愛していたともいえる。

△氏がこれを買ってから、五年ほどになる。デパートの時計売場のそばを通ったとき、ガラスのケースのなかに並べられた、たくさん時計の一つがキラリと光った。ちようど、女の子にウインクされたような気がした。また、

「あたしを買ってくれない……」

と、やさしく、ささやきかけられたようにも思えた。古代の異国の金貨が、文字盤になっている。たまたま、入社してはじめてのボーナスをもらった日だった。

「よし。買うことにしよう」

彼は思わずこうつぶやいた。それ以来、時計はずっと、△氏とともにいる。

△氏は、からだの一部でもあるかのように扱った。彼はまだ若く、自分では定期的な健康診断などを受ける気にはならなかったが、時計のほうは定期的に検査に出した。別なのを使うその数日は、彼にとって、たまらなくさびしい日だった。

しかし、そのため、狂ったりすることはまったくなかった。進みすぎもせず、おくれもせず、正確な時刻を、忠実に知らせつづけてきたのだ。

その時、ラジオが時報の音をたてた。△氏は首をかしげた。

「おかしいぞ。時報が狂うとは」

彼にとって、時計のほうを疑うのは、考えられないことだった。だが、ダイヤルをまわし、ほかの局を調べ、時報が正しいのを知って、あわてた。

もはや、切符を買っておいたバスの、発車時刻にまにあわなくなっている。彼は時計に文句を言った。

「おい。なんということをしてくれたのだ。これだけ大切に扱ってやっているのに」

しかし、どうしようもなかった。**ス**氏は旅行を中止し、散歩にでかけた。そして、ついでに時計店に立ち寄った。

「変なんだ。おくれはじめた。せつかくの週末が、ふいになってしまった」

「しかし、このあいだ検査をしたばかりですが……」

と、時計店の主人は受けとり、機械をのぞきこんでいたが、ふしぎそうな声で答えた。

「変ですね。どこにも故障なんかないようです」

「そんなはずはない」

そのとき、ポケットに入れっぱなしになっていたラジオが、ニュースをしゃべった。

〈観光シーズンです。**山**へ行くバスが……〉

それを聞きながら、**ス**氏は主張した。

「おかげで、このバスに乗りそこなったのだ。たしかに、この時計はどうかしている」

しかし、ニュースはそのさきをこう告げていた。

〈……事故のため、谷へ転落して……〉